
ツバサ・Dream…

さくら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ツバサ・Dream：

【Nコード】

N8289K

【作者名】

さくら

【あらすじ】

少女は旅をする
果てしない旅を。
6人の仲間と共に――

ツバサの原作沿いです。

あのツバサの一行にオリジナルキャラクターが加わっています。

「プロローグ」(前書き)

えーと…

これはツバサの原作沿いです。

あのツバサの一行にオリジナルの人物が加わっています。

しかも(多分)CCさくらとも少し関わりがあります。

その事をご理解頂けたうえで、ご覧下さいm()m

そしてこうゆう二次元小説は初めてなのではつきり言っすんごく駄目文です。ご了承下さい。

「プロローグ」

「ん…」

少女はゆっくりと目を開けた。
雨が降っている。

それが少し気持ちが悪い。

—どこだろう…？ここ…

「目が覚めたかしら？」

少女が思考を巡らせていると凜とした雰囲気的女性が話しかけてきた。

一瞬ビクツとしたが、すぐに落ち着いた。

「あなた…は？」

不思議そうに、ぼうつとしながら少女は尋ねる。
その時、ある事に気づき疑問をもった。

（この人、雨にぬれてない…どうして？）

少女は怪訝そうな表情になるが、女性にかまわなかった。

「私は壺原侑子^{いちはら ゆうこ}。偽名^{いつい}だけど」

「ぎ、偽名…？（何で！？）」

少女は少しずつこけそうになった。
わざわざ偽名と言う事にも少し拍子抜けしてしまった。

「あなたは？」

侑子が少女の名前を聞く。

また少女は驚き、ビクツとした。

「あわ、私は、み、ずき、水城、光、です。」

少女——光は戸惑いながら答える。

少し混乱もしているらしく、どもっていた。

「…あの、ここは…？」

不安げな表情で辺りを見回す少女。
髪から雫が落ちる。

「ここは願いの叶う店」

凜とした声で侑子は言った。

「ね…がい？」

侑子の言葉に少し目を見開く。

「ここに来たのは願いがあるから」

「…私に？」

「あなたの願いは…何？」

「わ…たし…」

光は途切れ途切れ言う。
唇が少し震えていた。

「私…私の…」

うつむく。
こくり、と唾を飲む。

「私の…願いは——…」

光が言おうとしたその時…

キイイイイイイイイ

「え!？」

光はぱつと顔を上げる。
そこへ

ドン　と音をたて、少年と少女が空から現れた——

「プロローグ」(後書き)

どうでした？

とりあえずヒロインは出ました。

ヒロイン『は』！

感想でも文句でもアドバイスでも良いので、コメントお願いします！

第1回 「始まりの世界」

少年は少女をかかえている。
みた事のない服を着ていた。

（男の子と…女の子？）

光は咄然としていた。

空から出てきたことに驚いた。

少年が口を開く。

「あなたが…次元の魔女ですか!？」

「そうとも呼ばれているわね」

二人の会話に疑問を抱く。

「次元の魔女？（侑子さんじゃないの？本名…なわけないない）」

首をふるっと振った。

まさか本名なんていうのは、ありえないだろう。

少年は目の前の女性が自分の求めていた人だとわかると必死に告げた。

「さくらを助けてください!」

その顔は、とても悲痛な表情だった。

（助ける？あの子、どうしたの？）

光が見る限り、少女は眠っているように見えた。
光を無視し、ことは進んでいく。

「この子の名はさくらサクラというのね」

「はい」

「あなたは？」

「小狼シャオランです。」

（あの男の子、小狼っていうんだ。てことは中国人？でも中国服着てないし…んんー？）

光は首をひねった。

侑子はすっと未だ眠り続けているさくらに手をかざす。

「この子は大切なものをなくしたのね」

「…はい」

二人とも少し辛そうに言う。

光は（大切なものってなんだろう…？）と考えていた。
侑子が再び口を開く。

「そして…それはいろんな世界に飛び散ってしまった」

(飛び散る?)

「このままでは　この子は死ぬわ」

(!!!!)

小狼は侑子の言葉にさくらを抱く腕の力を強めた。
歯を、強く食いしぼりながら。

(あの子…死んじゃう…の…!!?　そんな…!!)

光は口に手をあて、目に涙を浮かばず。

死ぬ。それがどんなに重く、辛く、悲しいことか光は知っている。
胸にポツカリと穴が空いてしまったような虚無感も。

しかし、そんなことはお構いなしに話は進んでいく。

侑子は四月一日という少年に何か頼んだ後、小狼に「その子を助け
ワタヌキ
たい?」と問う。

光は思う。

(そんなの…決まってる)

———助けられるなら

「はい!」

小狼の口から出たのは、光が予想したものだった

侑子は次に「対価がいるわ。それでも?」と試すかのように言った。

「おれにできることなら!」

小狼は答えた

(なんて…まっすぐなんだろう)

光がそう思った時だった。

また、あの音。

キイイイイイイ

(また！)

「来たわね」

侑子が分かっていたかのようにそう言うと、小狼の両脇に二人の男性が天と地から現れた。

「貴方が次元の魔女ですかー？」 「てめえ誰だ？」

二人の男性は同時に言う。

黒い男の人はム、と金髪の人を不機嫌そうに見て、金髪の人黒い人を見ている。

まるで正反対な二人の男性。

「先に名乗りなさいな」

侑子の言葉に黒い男の人が答えた。

「俺あ黒鋼^{くろがね}。つか、ここどこだよ」

黒い人——黒鋼は「なんだ？まわりの妙な建物は」と言いながら周りを見ている。

「日本にほんよ」

「ああ？俺がいた国も日本ニホンだぜ」

「それとは違う日本」

「わけわかんねえぞ。さっぱりだ！」

ますます不機嫌そうになる黒鋼。

〔私も何もかもさっぱりですよ！！！何ですか！？その戦って来ました！みたいなほっぺの血は！！！〕

光は心の中で叫んだ。

泣きたかった。

「あなたは…」

今度は金髪の人を見る侑子。

するとその人はスツと頭を下げて言った。

「セレス国の魔術師ウィザード。ファイ・D・フローライトです——」

（ウィザード…？…魔法使いさんなんだー）

光はどこか麻痺し始めていた。

「ここがどこだか知ってる？」

「え——、相応の対価を払えば願いをかなえてくれる所だと」

ファイはすらすらと答える。

（へーそーゆー場所なんだ）

「その通りよ」

侑子も肯定する。

ただ単に願いをかなえる店だと思っていた光は納得した。

「さて、あなた達がここに来たということは何か願いがあるということ」

「元いた所へ今すぐ帰せ」「元いた所にだけは帰りたくありません」

黒鋼とファイが見事に再びハモる

（わー！ハモったー！）

黒鋼はファイをギロっと睨む。

「それはまた難題ねふたりとも、いいえ、五人ともかしら」

「ち、ちょっと待った！」

光が大声を出す

そこにいた侑子以外の三人が驚いたように光を見た。
実は今まで眼中に無かったのだ。

「何かしら」

「私はまだ願いを言っていないし、第一、四人でしょう!?! まさかその女の子も入ってるの!?!」

光は納得がいかない! というように叫ぶ。

「入っていないわ」

「じゃあ…!」

「もうひとり、いるのよ」

「…え?」

キイイイイイイ

「また!」

「ま、まだくるんですか!?!」

「マジかよ!」

「うわー」

ドン

さっきと同じように一人の少年が現れた。

このメンバーでは一番小さい。
まだほんの子供だ。

光は「なんか小狼君に似てる？」と思った。

「ついたか」

「こんにちは」

「あなたが次元の魔女なのか？」

「そうよ」

「父さ…父上に言われて、ここに来た」

「そう。あなたの願いは？」

「…おれのやるべき事をやらせて欲しい。母さ…母上の見た夢を、
現実にしないうために。」

そのために、異世界へ行きたい。ヒントはそこにあるから。…本
当は自分で行けたら良いんだけど…行けないから…」

「そう…。あなたはお父様にそっくりね。そして、お母様にも」

「父上と母上を知っているのか？」

「ええ。でも、会ったことは無いわ」

そう言うと、侑子は話を続けた。

少年は不思議そうに小首をかしげた。

「その願い あなた達が持つのもとも価値あるものでも払いきれ
るものではないわ」

侑子の言葉に小狼は顔をしかめた。

「けれど五人一緒に払うならぎりぎりって所かしら」

小狼ははっと顔をあげる。

「なにいつてんだてめー？」

「ちよい静かに頼むよおそこの黒いの」

「黒いのじゃねえー！黒鋼だっつのー！！」

またしても黒鋼が叫んだ。

「あなた達五人の願いは同じなのよ」

小狼を見て

「その子の飛び散った羽根を集めるために色んな世界に行きたい」

黒鋼を見て

「この異世界から元の世界に行きたい」

ファイを見て

「元の世界へ戻りたくないから他の世界へ行きたい」

少年を見て

「自分のやるべき事をやるために、未来を変えるために異世界へ行きたい」

そして、光を見る。

「そして、あなたは…」

「…一緒に行きたい…私の…やるべき事を見つけるために！よく分からないけれど、一緒に行かないといけない気がするの！」

拳を握り、光は答えた。

「目的は違うけど手段は一緒。ようは違う次元、異世界に行きたいの。」

ひとりずつではその願い、かなえることはできないけれど、五人一緒に行くのなら、

ひとつの願いに五人分の対価ってことでOKしてもいいわ」

「俺の対価ってなんだよ」

黒鋼が問う。

「その刀」

「なっ！銀竜はぜってー渡さねえぞっ！！」

黒鋼は銀竜を侑子から遠ざける。

「いいわよ。そのかわりそのコスプレな格好でこの世界を歩きまわって、銃刀法違反で警察に捕まったりテレビに取材されたりするがいいわ」

侑子はずいずいと迫る

「あ？けいさ？てれ？」

黒鋼は聞いたことのない単語のオンパレードに疑問符を浮かべている。

「今、あなたがいるこの世界にはあたし以外に異世界へ人を渡せるものはいないから」

「んなデタラメっ！」

「本当だぞー」

「本当だ」

ファイと少年の言葉に黒鋼はぴくつと反応した。

「マジかよ！？」

黒鋼の言葉にファイはへにゃと笑った。
そして少年は真面目な顔して

「マジです」

と答えた。

「どうするの？」

侑子にはやりと笑う
挑発的な笑みだった。

「くっそー！絶対「呪」を解かせたらまた戻って来てとりかえすかな！」

黒鋼は悔しそうに叫ぶと、バツと銀竜を突き出した。
侑子は次にファイを見る。

「あなたの対価はそのイレズミ」

「この杖じゃダメですかねえ」

「だめよ 言ったでしょ 対価はもつとも価値あるものをもって」

ファイは少し沈んだ顔でフードを取ると

「仕方ないですねえ」

と困ったように笑った。
すると、スウ、とイレズミが浮き出てきた。

次に侑子は少年を見る。

「あなたの対価は…魔力の半分」

「…はい！」

少年ははっきりと言った。

もう覚悟は出来ているらしかった。

しかし少し悲しそうなところを見ると、大切だった事がわかる。

それでも迷いも無く差し出す。

少年の体が光り、胸元から蒼く、そして緑のような輝く結晶が浮き出てきた。

少し辛そうにする少年。

そして、光

「あなたの対価は…その髪」

「えっ…！この…？」

光は自分の髪を手取る。

（この髪は…お母さんから受け継いだ大切な…！大好きな…オレンジの髪…！）

ぎゅっと髪を握る。

「首の辺りぐらいまでいいわ」

「！」

「ただし、二度と伸びないけれど」

「…分かりました」

光は目をつぶった。

（ゼロになるわけじゃ無い。それに、これしかない）

次に目をあけた時、腰までであった髪はぱつさりと無くなり、首の後ろ辺りまでになっていた。

侑子は小狼を見た。

そして問う。

「あなたはどうか？自分の一番大切なものをあたしに差し出して異世界に行く方法を手に入れる？」

「はい」

小狼ははっきりと答えた。

「あなたの対価が何かまだ言っていないの？」

「はい」

「あたしができるのは異世界へ行く手助けだけ。その子の記憶の力ケラを探すのはあなたが自分の力でやらなきゃならないのよ」

「…はい」

小狼の瞳に迷いは無かった。

それを見て侑子は

「…いい覚悟だわ」

と微笑んだ。

「って増えてるし——！」

「来たわね」

バタバタと先ほどの少年、四月一日が走ってくる。

その手には白と黒という対になっているウサギのような動物(?)
がいた。

侑子は白い方をスツと取る。

そして説明をはじめた。

「この子の名前はモコナⅡモドキ。モコナがあなた達を異世界へ連れていくわ」

黒い方がシュタツと手を上げる。

「おい、もう一匹いるじゃねえか。そっちよこせよ。俺あそっちで行く」

黒鋼が言う。しかし侑子は

「そっちは通信専用。できることはこっちのモコナと通信できるだけ」

「ちっ」

「あら便利なのよ」

侑子は五人に向き直る。

「モコナはあなた達を異世界に連れて行くけれど、そこがどんな世界なのかまではコントロールできないわ。だから、いつあなた達の願いがかなうのかは運次第。けれど、世の中に偶然はない。あるのは必然だけ。あなた達が出会ったのも、また必然」

侑子は小狼を見た。

「小狼、あなたの対価は…」

カンケイセイ
関係性」

光は「関係性？」と思ったが、悲しそうに顔を歪め、拳を強く握り締めている少年が目に入り、ただ事じゃあないと思った

「あなたにとって一番大切なものはその子との関係。だからそれをもたらうわ」

「それってどういう…？」

「もしその子の記憶がすべて戻っても、アナタトソノあなたとその子コハモウオナジはもう同じ関係には戻れない。カンケイニハモドレナイ

その子はあなたにとって、なに？」

侑子の質問で小狼はさくらを見る。

そして苦しそうに口を開いた

「幼なじみで…」

今いる国のお姫様で…

俺の…

俺の大切な人です」

「…そう」

そうつぶやいた侑子の顔は悲しげだ。

しかし、その口から出てくるのは残酷なものだった。

「けれど、モコナを受け取るならその関係はなくなるわ」

小狼はえっ…！！！！という顔になる。

「その子の記憶をすべて取り戻せたとしても その子の中に貴方に
関する過去の記憶だけは、

ケツ シテ モド ラナイ
決して戻らない

それがあなたの対価。それでも？」

「…行きます。さくらは絶対死なせない！」

「…異界を旅するということは想像以上に辛いことよ。様々な世界
があるわ。例えばその四人がいた世界、服装をみただけでも分か
るでしょう。すべてあなたがいた世界とは違う。知っている人、前
の世界で会った人が、別の世界では全く違った人生を送っている。

同じ姿をした人に色んな世界で何度も会う場合もあるわ。前に優しくしてくれたからといって、今度も味方とは限らない。言葉や常識が全く通じない世界もある。科学力や生活水準、法律も世界ごとに違う。中には犯罪者だらけの世界や、嘘ばかりの世界や戦の真つ最中という世界もある。その中で生きて旅を続けるのよ。何処にあるのか、何時^{いつ}すべて集まるのか分からない。記憶^いのカケラを探す旅を」

侑子は静かに語っていたが少し微笑むと

「でも、決心は揺るがない…のね」

と言った。

小狼も「…はい」と答える。

「覚悟と誠意。何かをやり遂げるために必要なものが、あなたにはちゃんと備わっているようね」

そう言いながらモコナを掲げる。
フオオオオオオオンと音がした。

「では、行きなさい」

侑子がそう言うのと魔方陣が出てきて白いモコナに翼が生える。
そしてモコナがガバアツと口を開けた。
するとすごい勢いで吸い込まれる。

「きゃあああ！」

「くっ…！」

ぱくんつとモコナはみんなを飲み込みシュルンと消えた。

雨がやんでくる。

「どうか、彼らの旅路に幸多からんことを」

第1回 「始まりの世界」 (後書き)

や、やっと終わりました：『第一回』が！
な、長い…。読みにくかったら本当にすみません！
感想、意見、お待ちしております！

第2回 「阪神共和国」

——さくらは

おれの一番大事なひとだ

これからも ずっと 一番大事なひとだ

だから

何があっても

何をしても

絶対に死なせない

例え さくらがおれを忘れても

絶対に——

「さくら!!」

「ふう みたいな？」

「さ……くら……」

小狼が目覚ますとモコナがいた。

「……ツっこんでくれない」としくしく泣きまねをしている。

小狼は「??」と疑問符を浮かべた。
するとファイがモコナを抱えて

「あ——、目覚めたみたいだねえ」

と笑った。

小狼はハッとなって「さくら!」と叫びながらガバツと起きる。
しかし、さくらは小狼の腕の中にいた。

小狼はぎゅ、と力をこめる。

「あの…」

「え?」

小狼は呼ばれて振り返った。

「一応拭いたんです。雨でぬれてたから。寒くありませんか?」

「あ、はい」

「モコナも拭いたー!」

「オレもね」

小狼は「女の子に拭かれた」と思うと恥ずかしくなった。
頬がほんのり紅く染まる。

「寝ながらもその子のこと、絶対離さなかったんだよ。君——え
つと…」

「小狼です」

小狼はファイが名前がわからないようだったので名乗った。
その横でモコナは「えへーえへーほめてー」といっている。

「こっちは名前長いんだー。ファイでいいよー」

ファイは自分を指差して言う。

「でー君はー？」

「光です。水城光といいます。」

「光ちゃんって言うんだーかーわいー」

「そっそんな事は！」

慌てる光。

「おれも良い名前だと思います」

小狼も笑って言った。

「∴」

その笑みが、光には無理をしているように見えた。
その時

「うわああああー!!」

「!？」

今まで眠っていた少年が声をあげた。
そして

「遅刻する!!」

とわけの分からないことを言う。

「あの…?」

「え?」

小狼が声をかけると少年はハッとなった。

「そうか! 異世界に来てたんだった!」

「「え…」」

「…忘れてたんだねえ」

「マジかよ…」

「ふう! 面白ーっ! この子!」

少年の言葉に一時、先ほどの空気が壊れた。

「あの…君、名前は?」

光が聞く。

「あ、リシャオロン李小龍だ」

「小龍…くん？（小狼くんに似てる…）」

光はそう思ったので、後で聞くことにした。

そして小龍に「あの人は小狼くんって言って、あの人はファイさん。私は光だよ」と教えた。

小龍は「ありがとう」と笑った。

モコナがぴょんっと黒鋼へ向かう。

「で そっちの黒いのはなんて呼ぼうか——」

ファイがそういうと

「黒いのじゃねえ！黒鋼だっ！」

と怒鳴りながら名乗った

「くろがねね——ほいほい」

ファイは頷きながら「くろちゃんとかー？くろりんとかー？」など
と言い、

黒鋼は膝のうえに乗ったモコナに「うわっ」と驚き

「おいてめっ！何膝のってんだ！」と言って（怒鳴って？）いる。

しかし小狼はそんな騒動は耳に入らないようでさくらを心配そうに
みている。

光はそんな小狼を心配そうに見ていた。

そして小龍も。

小龍はどっちかというところ「小狼」では無く、「小狼とさくら」のよ
うだったが。

（体、氷みたいだ…！）

小狼はさくらのからだの冷たさで心配と不安がさらに増した。

（このままじゃ記憶のカケラを探す前にさくらが…！）

そう考えていると…

ずぼっ

「うわっ!!」

ファイが小狼のマントの中に手をつっこんだ。

「ん——…？」といいながら手をごそごそ、さわさわと動かす。
そんなファイに

「なにしてんだてめえ」

と黒鋼はいやな物を見るような目で見ていて

「ふあ、、、ファイ…さん…？」

と光はひいている。

小龍は

「え？ えええ？」

と、あまり分からない様だったが。

ファイはそんなのお構いなしに小狼のマントの中から何かを取り出す。

その手には…

「これ記憶のカケラだねえ。その子の」

「え!？」

「君にひっかかってたんだよ。ひとつだけ」

「あの時飛び散った羽根だ」

「そ、そういうことかあ…（よ、良かった…）」

光は自分の誤解だと分かり、ほっと息を吐いた。

「これが」

羽根がスウとさくらに溶けていく…。

「さくらの記憶のカケラ」

さくらの体に体温が戻る。

「体が…暖かくなった」

小狼はほっとする。

そして光と小龍も。

「今の羽根がなかったらちょっと危なかったね——」

ファイがにへと笑いながら言う。

「おれの服に偶然ひっかったから…」

「この世に偶然なんてない」
コノヨニグウゼンナンテナイ

「…え？」

みんな小龍を見た。

だって今までの小龍の声と何か違う気がしたから…。

「あるのは…必然^{ヒツゼン}だけだ」

「シャオ…」って魔女も言ってただろ「え…」

「そういえばいつてたねー。てことは、この羽根も小狼くんがきつと無意識につかまえたんだね。その子を助けるために」

ファイの言葉に小狼は少し笑った。

…が

「なんてね——良くわかんないんだけどね——」

くにゃんとファイは言った。

「えっ」

「……………」

「ふあ、ファイさん…」

小狼、黒鋼、光は驚きあきれる。

しかし、小龍は…。

「…そうなのか…」

…納得していた。

「どうやらファイの「なんてねー」発言は聞いてなかったらしい。

「けど、これからはどうやって探そうかねー、羽根。もう服にはくっついてないみたいだしねえ」

「は——いははいっ。モコナ分かる！」

「え？」

「今の羽根、すごく強い波動を出してる。だから近くなったら分かる。波動をキャッチしたらモコナこんな感じになる」

モコナの目がめきよっと大きく開く。

「げっ！」

「きゃっ！」

「うわっ！」

それに黒鋼、光、小龍は驚いた。

しかし目の前でやられた小狼は少し汗をかいただけだった。

小龍、光はけっこうすぐに復活したが、黒鋼はばくばくと心臓がまだ落ち着かず、壁に手をついている。

そんなのは無視してファイ、小狼、モコナの三人は話をすすめてい

た。

「だったらいけるかもしれないね——。近くになればモコナが感知してくれるなら」

「あ、私もわかります！あの波動！」

「おれも分かる。魔力が半分になってしまったから微妙だけど…」

「本当ですか！？」

光と小龍の言葉に小狼は反応する。

「はい！」

光はそう言って笑った。

小龍は微笑しながらこくりと頷く。

「教えてもらえますか？あの羽根が近くにあった時」

「どーんとまかしとけ！」

「もちろんです！」

「おれにできることならやる」

小狼の問いに三人…否、二人と1モコナは笑って答えた。

「…ありがとうございます」

小狼も微笑んだ。
そんな時

「おまえらが羽根を探そうが探すまいが勝手だがな」

黒鋼が口を開く。

「俺にゃあ関係ねえぞ」

みんなが黒鋼を見る。

「俺は自分がいた世界に帰る。それだけが目的だ。おまえ達の事情に首をつっこむつもりも手伝うつもりも全くねえ」

光はムカツときた。

「そんな言い方———！」

「はい。これはおれの問題だから、迷惑かけないように気をつけます。」

一発文句をいおうとした光だが小狼の言葉に驚いた。
それは黒鋼もだが。

「ちっ」と舌打ちする。
思っていたのと違う反応が返ってきたからだ。

「あはははは——。真面目なんだねえ小狼くん——」

「えら——い……」

ファイと光の言葉に小狼は疑問符を浮かべた。
そんな小狼を小龍はぼお——っと思っていた。
すこし、さびしそうに。

「そっちはどうなんだ」

「んん？」

「え？」

「…え？」

「そのガキ手伝ってやるってか？」

「ん——、そうだねえ。とりあえずオレは元いた世界に戻らない
ことが一番大事なことからなあ。ま 命に関わらない程度のこと
ならやるよ——。他にやることもないし。光ちゃんと小龍くんは？」

「私はお手伝いします。お姫様助けたいし、私の願いは『やるべき
事を見つける』ですから」

「おれは手伝う！確かにおれにだって願いはあるし、それはおれの
やるべきことだけど…死んで…ほしくない…。その人に元気になっ
て欲しい！」

光は笑って言ったが、小龍は必死だった。
まるで、さくらをととても大切に思っているみたいに…。

「よう！」

かちゃ、とドアが開いて男女が二人入って来た。

「目え覚めたか！」

小狼はさくらをだきしめる。

「んな警戒せんでええって侑子さんそこから来たんやろ」
「ゆうこさん？」

小狼が聞く。

その間に女の人が布団を出している。

「次元の魔女さんのことだよ」

「せや、次元の魔女とか極東の魔女とか色々呼ばれとるな」

「これを」

女の方は小狼に布団を渡す。

「あ！ありがとうございます」

「あ、おれ手伝う！」

「私も！」

さくらに布団をかける。

「わいは有栖川空汰^{ありすがわ そらた}
^{あらし}嵐です」

嵐はぺこと頭を下げる。

空汰は「ちなみにわいの愛する奥さん、ハニーやから、そこんこ心に刻みまくっといてくれ」と言うが嵐は無視して空汰からお茶の乗ったお盆を取る。

そしてお茶を配った。

「は—— こんなハニーと結婚できてわいは幸せや——」

ほわーとなる空汰とその様子を見ている黒鋼とファイと光。

無視して「どうぞ」と小狼と小龍にお茶を渡す嵐。

こちらは無視(?)してぺこりと頭を下げて「小狼です」と自己紹介する小狼。

そしてちらつと空汰を見てから「小龍です。あ、あったかい」とか言っている小龍。

そして空汰はくるっと振り返ると黒鋼に

「つーわけでハニーに手え出したらぶっ殺すでっ (ハァト)」

と言った。

「なんで俺だけに言うんだよ!!」

「ノリやノリ。ノリは命や!」

あはははと笑う空汰…と合わせて踊るモコナ。
するとまた空汰は振り返りいい笑顔で

「でも本気やぞ!」

と言いぐつと親指を立てた。

「出さねえっつの!!」

そんな二人の会話を聞いていた小龍がファイにとんでもないことを聞いた。

「…ねえ。ファイさん」

「んー? 何?」

「手を出すってなんのことだ?」

「!!!???: 君はまだ知らなくていいかなあー?」

「えー?」

「あ、おれも知りたいです」

「小狼くんまで!」

「あ、私も」

「光ちゃん!」?

「なあなあファイさん」

「んー? もう少し大人になったらね?」

「むー——」

小龍は拗ねてしまった。

「「?」?」

小狼と光は拗ねたりはしないものの、首をかしげていた。
好奇心旺盛な子がいると大変だ。

「さて」

空汰はモコナを手に乗せて話す。

「とりあえず、あの魔女の姉ちゃんにこれあずかって来たんやな」

「モコナⅡモドキ!」

モコナはしゅたっと手を上げる。

「長いな。モコナでええか」

「おう! ええ!」

モコナは空汰のまねをして答える。

「事情はその兄ちゃんらに聞いた。主にそっちの金髪のほうと姉ちゃんやけどな。黒い方は愛想ないな。ほんま」

「うっせー」

「とりあえず兄ちゃんらプチャッキーやったな」

「えーっと、どのへんがー？」

「モコナは次に行く世界を選べへんねやろ？それがココやなんて幸せ以外の何もんでもないで——」

空汰は窓に向かっててこてこ歩きながら言う。

「ここは」

ガラッ窓を開ける。

「阪神共和国やからな」

第2回 「阪神共和国」 (後書き)

始まりましたっ。阪神共和国！
だんだんとなれて来ました…かな？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8289k/>

ツバサ・Dream…

2011年10月6日20時09分発行